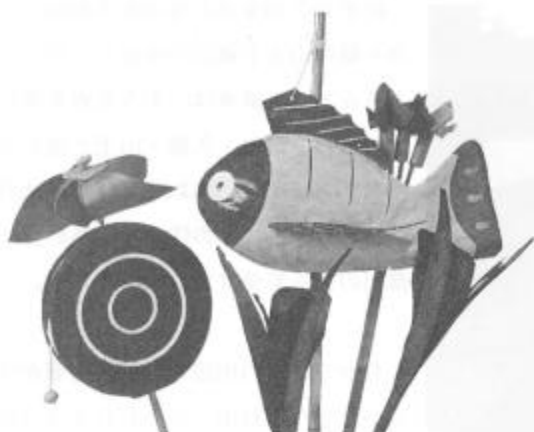


24 黄鮎と郷土玩具

伝承地：西原2丁目

話者：1 参考書籍：11・17



(黄鮎と郷土玩具)

宇都宮を代表する郷土玩具として、黄鮎・綿花・あやめ・豆太鼓があるが、本来これ等は、縁起物として作られたもので、正月の初詣や11日の初市で買い求め神棚に供え、暮れの二荒山神社のおたりや(冬渡祭)の際、だるまや他の縁起物と一緒に焼やしたものである。かつては、南新町の農家の副業として盛んに作られたが、現在では、浅川宅で製作されているだけであるため、貴重な民芸品になりつつある。次に、この4種の縁起物の由

来について簡単に紹介する。なお、黄鮎については、他に宮島町付近に住んでいた大右衛門という狐師(漁師)と仙人の話が伝えられている。

1. 黄鮎(張子で作る) ある時、宇都宮に天然痘が大流行したことがあった。むかしのことなので、良い薬もなく人々は、なりゆきにまかす以外に方法がなかった。ところが、ある人が田川にすむ黄色の鮎を食べたところ不思議にも天然痘がなおってしまっただけでなく、黄鮎を食べた人は病気にかからなかったという。しかし、黄鮎はそう簡単に釣れるものではなかった。そこで張子の黄鮎を作って今年も疫病にかからぬようにと年の初め、軒下につるし、後に神棚に供えて無病息災を願う習慣が生じて今日にいたっている。
2. 綿花(紙と竹で作る) 農業に関する縁起物でむかしは、多くの農家で綿を作っていた。農民は自分達の衣類の多くを綿を原料とした木綿の布で作ったのである。綿の花は秋口に咲き、この花の咲き具合で、その年の稲の豊凶をうらなったという。そのため、綿の花がよく咲き、稲が豊作であることを祈って新年に造花の綿花を神棚に供えた。
3. あやめ(経木と竹ぐしで作る) むかしはあやめの咲くころ、田植が行われた。あやめは水を好む、水が豊富ならあやめがよく咲く、故にあやめがよく咲く年は水が豊かで稲も豊作だということで、あやめの花を模したものを作り、正月神に供えて、その年の豊作を願ったということであり、綿花と同じく農業に関する縁起物である。
4. 豆太鼓(紙製の小太鼓の両側に大豆を一つずつ糸でつるしたもの) これも、正月の縁起物で、子供がマメに丈夫に育つようにと作られたもので、玩具的色彩(たいこを回すと、大豆があたりよい音を出すので、これで乳児をあやした。)がこい。

同時に、家族もみなマメで、太鼓のようにまるく、家内円満を願ったものである。

